高橋和巳 作品集 9

高橋和巳作品集

9

河出書房新社

高橋和巳作品集9　中国文学論集　©1972

1972年3月30日初版発行
1973年10月25日再版発行

著　者　高橋和巳
装幀者　粟津　潔
発行者　中島隆之
印刷者　草刈龍平

定価は函・帯にあります。

発行所　株式会社　河出書房新社
東京都千代田区神田小川町3-6
電話　東京　292-3711(大代表)
振替　東京　10802

印刷・中央精版印刷　製本・小高製本

高橋和巳作品集 9

表現者の態度

表現者の態度Ⅰ——司馬遷の發憤著書の説について 9
表現者の態度Ⅱ——職業としての文学の誕生 29

六朝文学論

六朝美文論 61
陸機の伝記とその文学 112
潘岳論 251
顔延之の文学 370
江淹の文学 399
劉勰『文心雕龍』文学論の基礎概念の検討 420
中国の物語詩——おもに「秋胡行」について 460
顔延之と謝靈運 493

漢詩鑑賞入門
中国詩史梗概 561
六朝詩選 579
現代中国文学
文学研究の諸問題Ⅰ 671
文学研究の諸問題Ⅱ 685
文学研究の諸問題Ⅲ 699
解題 713

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

高橋和巳作品集 9

中国文学論集

表現者の態度

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

表現者の態度 I——司馬遷の發憤著書の説について

新しい文学の登場は、単に表現技術の変革や新素材の発見によるばかりでなく、常に新しい文学的態度の確立に裏付けられてなされる。それゆえに文学論ないしは文学批評なるものは、表現の背後にあるその態度のあり方への提言や勧告を当然含むべきであり、とすれば漢の司馬遷の『史記』の序文「太史公自序」および友人任安に与えた返信「任少卿に報ずる書」は、中国の文学批評史上、——そしておそらくは世界の文芸思潮の中においても、見逃しえない重要な意味をもつものといえる。

中国における文学批評は、魏の曹丕（一八七—二二六）の『典論』論文の出現以降、魏晉南北朝時代がその確立期であると考えられ、それ以前はいわば批評史的前史時代として記述されるのが普通である。もちろん、断片的とはいえ、先秦諸子の言説や漢儒の著述の中には、以後の中国の文人意識のあり方を大きく規定する発言が多く含まれ、同時にそれらが後世の文学批評や理論に重要な基礎概念を提供することとなった故に、批評史的視角からする先秦諸子や漢儒の発言の抽出と整理の

作業も相当精密にすすめられてはいる。たとえば、孔子（BC五五一—四七九）の詩經観、孟子（BC三七二—二八九）の知人論世の説、荘子（?—BC二八九?）の輪扁説話にみられる一種の不可知論と天才主義の萌芽、そして漢代の経典注釈家たちによる比興説つまりは最初の解釈学的修辞学の完成など。それらの大要は郭紹虞の『中國文學批評史』をはじめ、羅根澤、傅庚生らの著述、わが国では鈴木虎雄博士の『支那詩論史』に、各々の比重において例外なく触れられている。また批評史的前史時代に定立された特定の観点や定義づけ、例えば『詩經』大序に明確にあらわれる「詩は志を言う」の説などに関する個別的専論も数多くあげることができる。だがそれら、漢代においては、司馬相如（BC一七九—一一七）や揚雄（BC五三—AD一八）、桓譚（BC二四—AD五六）や班固（三二—九二）らの断片的発言をすら忘れない文学批評史も、なぜかまったく司馬遷には触れていない。かつまた、最近盛んにおこなわれている司馬遷に関する伝記的研究や、『史記』のもつ文学性に注目する論文なども、李長之の『司馬遷の人格と風格』など少数の例外をのぞいては、司馬遷が人間の言語表現というこの活動に対して付与した強烈な意義づけ、言語表現と具体的な行為との関係についての独自な見解を、問題の俎上にのぼそうとはしていない。従ってまた司馬遷的態度というものが如何に強大な影響を後世に及ぼしたかということも見極められてはいない。

なるほど、『史記』は歴史であって、現在われわれがいう文学ではない。「太史公自序」や「任少卿に報ずる書」も、従ってまず第一義的には歴史家の態度表明であって文学者のそれではない。しかしながら、近代的なジャンルの区分に従って純粋な文学批評や文学論いがいの発言を問題の埒外

におくなら、魏晉以前の断片的発言はすべて文学批評史の紙面から抹殺しなければならないとする明らかな誤謬におちいる。

司馬遷の時代にわれわれが普通に意識するジャンル別や専門科目別がすでに存在していたのなら、一つの領域についての発言は他の領域と一応無縁のものとして取扱ってよいだろう。だが当時における〈文〉概念は、より総括的なものであり、しかも大切なことは、単にそれがジャンル分化の未発達ゆえに、偶然境界の重なり合う未開の見方が存したのではなくて、その時代においては一つの完成した見方として総括的視点が存したのである故に、現在のジャンル区別に対応する発言内容の比重如何によって、単純にこれは哲学、これは歴史、これは文学という風に区分することはできない、或いはしてはならないのである。確かに『文選』の時代すなわち西暦六世紀に確定する三十六体が、漢代に明確でないという点で、文学内のスタイル別については比較的には未分化であったといえる。だが儒家の経典、詩、書、易、春秋、禮が各自その性質を異にするという知識は早くからあったのであり、しかも、それを〈経〉ないし規範的な〈文〉なる一概念で総括的に把握していた、その「当時における完成された見方」の存在がより肝要なのである。過去の時代を歴史的に、発展的にみる見方はそれ自体正しいものだが、同時に一つの時代の心性（メンタリティ）の様相を、その時々に完成していた一つの円環として全体的に受けとることが、とりわけ精神科学の分野では大切である。人間の創造するもろもろの文化は、時の流れとともに移ろいゆくものではあっても、移ろうゆえに先を見越して何もしないというわけでは毛頭なく、かつまた人は最初から移ろいゆくものとし

てもろもろの価値を創りだすわけでもないからである。だがこの問題は別の機会に詳説するとして、ここでは、『史記』は、後世の文学者なかんずく古文家が秦漢の文と称するとき、その典型的模範として尊敬されたことからも知れる通り、すくなくとも中国においては、長らく散文文学としても意識され読まれたものであることを指摘するだけで十分であろう。たとえば宋の唐庚の『文錄』にいう。「六經已後、便わち司馬遷有り。三百五篇（『詩經』のこと）の後、便わち杜子美（杜甫）有り。（中略）故に文を作るには當に司馬遷を學ぶべく、詩を作るには當に杜子美を學ぶべし。二書亦た須らく常に讀むべし、所謂何んぞ一日として此の君無かる可けんや也」

さて問題の「太史公自序」は、便宜的に分ければほぼ六つの部分からなっている。

冒頭は司馬氏の家系を述べた部分。ここで司馬氏が世々相伝の歴史家・天文家の家柄であることが述べられる。

次は任職三十年の太史令であった父の司馬談の簡単な学歴、および彼の思想的立場が説明され、その立場すなわち道家的観点からする、当時有力であった六つの学派の理論要旨の紹介と長所欠点の指摘がある。同時にそれは父の遺志を継いだ司馬遷じしんの思想的立場の表明としての意味をもつ。六派とは、武田泰淳の『史記の世界』のみごとな要約にそいつついえば、宇宙形而上学派たる陰陽家、〈禮〉を根幹とした個人倫理は、社会秩序や政治理論にも一元的・同心円的に適応しうるとする儒家、節倹力行主義の墨家、言語形而上学派ないしは論理学派である名家、法律至上主義

の法家、道徳的にも政治的にも徹底した自然主義を押し通す道家である。その六派批判の前に『易』の言葉「天下は一致にして百慮、歸を同じくして塗を殊にす」が引用されていることからもあきらかなように、司馬遷の基本的態度は記録者の凝固的空間においてのみなされる純粋客観主義にある。司馬遷はいう。「太史公は既に天官を掌す。民を治めず」と。民を治める立場にはかかる客観主義は存しえないが、記録者には、傾向を異にする種々の動向の帰結を透視することができると暗に主張するわけである。のちに説く司馬遷の言語表現の意義づけにこの前提は、正反両面に大きく作用する。

第三の部分では司馬遷自身の経歴が述べられる。自序の記述にそいつつ、前人諸研究家の業績を利用して簡単に説明すれば、それはほぼ次のようである。西暦紀元前一四五年、漢景帝の中元五年ごろに生れたと推定される司馬遷は、十歳のころ都の長安に出て孔子十二世の孫である儒学者孔安國に古文『尚書』を学び、ついで二十歳のころから大規模な旅行をおこなった。足跡は、江淮の北方から、會稽、長沙、齊魯、徐州、大梁、登封におよんでいる。古戦場や偉人の生地をたずねる漫遊の旅である。そののち郎中となり、漢武帝の巡行にしたがって、扶風、平凉、空洞に行き、また二十五歳のころには使いを奉じて巴蜀、滇、昆明にもゆき、その見聞の範囲はほとんど全国的だったといえる。紀元前一一〇年、漢武帝が封禅の儀式をおこなったとき、父の司馬談は史官でありながら病気のために参加できず発憤して司馬遷に歴史家の任務を説ききかす。……周に暴君幽王・厲王のあらわれてのち、王道は欠け、礼楽は衰えた。孔子があらわれてそれを復さんとし、旧きを

修め廃れたるを起し、『詩』『書』を整備し、『春秋』を作った。学者たちは以後いまにいたるまでそれを規範としている。だが、『春秋』の終幕たる獲麟の故事いらい四百有余年を経ているが、歴史記録の伝統は絶えてひさしい。いま漢が天下を統一し、自分は歴史官となったが、論著は完成せず、このままでは天下の歴史の廃れるのが懼れられる。「余死せば汝必らず太史爲れ。太史と爲らば吾れの論著せんとする所を忘るる無かれ。且つ夫れ、孝は親に事うるに始まり、君に事うるに中だち、身を立つるに終る。名を後世に揚げ、以て父母を後世に顯わすはこれ孝の大なる者なり。」読みくだしたこの部分の後半はまったく『孝經』の文章の借用であるが、これものちに述べる司馬遷の「發憤著書」の説の一つの裏付けをなす観念であり、彼の経歴との照応において一つの痛切な意味をもつ。父の司馬談は司馬遷二十六歳のころに死亡。喪があけて、彼は父の職務をつぎ、宮廷に保存された記録をむさぼり読む。数年後、彼三十歳のころより実際に『史記』の著述をはじめるわけである。

「太史公自序」は、つぎに春秋学者董仲舒（BC一七九―一〇四）の言葉をかりて六経の区分、とくに『春秋』の性格規定をなし、それとの比較において、『史記』がより既事実的であることを説明する。この部分に歴史家としての明確な態度表明が、孔子の言葉をかりてなされている。「我れは之を空言に載せんとしても、之を行事に見わすの深切著明なるに如かず。」理論的裁断よりは事実ありのままの記録を選ぶというこの言葉は、元来経書を補うものとして意識されるものながら、資料的信憑性には乏しい緯書（中国における偽聖書のようなもの）にのせるもので、孔子の発言とし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com